

韓国新聞にみる伝統と海外の影響

春原昭彦

新聞の誕生には、外国からの影響、移入など、外的事情に触発されて発生した事例が多い。欧米に見ても、英国最初の日刊紙はオランダの新聞の影響を受けたものだし、米国の新聞はもちろん、英国その他ヨーロッパ大陸の影響を受けて発生したものである。アジアの新聞も例外ではない。

ただ、新聞という形式はそうであっても、種々のニュースや知識など、情報を伝達する手段は、国や民族を問わず、古くから持っているし、その技術もかなり進んでいたところも多い。現代の新聞に近い形（定期性や量的複製など）を持つ「近代的新聞」が各国に現れたのはそう古いことではなく、だいたい十九世紀になってからと言ってもよいだろう。アジアでも十九世紀後半になると、「近代的新聞」が現れてくる。

だが、近代的新聞といっても、その後の発展は、国によって違ってくる。もちろん新聞の性格は、その国の政治体制、社会体制、および経済的発展、文化、国民性などによって規定されるものだが、同じアジアに隣接する国で、ほぼ同じころ欧米列強の圧力の下に、世界に門戸を開いた日本と韓国、および中国に生まれた新聞とは、まったく西欧文明の産物なのだろうか。新聞がその国の近代化や発展に果たした役割が注目されるにつれ、「東洋の初期ジャーナリズムに対する西欧ジャーナリズムの影響」について比較検討を加えてみよう、という考えが出てくるのは

当然であろう。一九九〇年五月四日、韓国言論学会がソウルの韓国言論会館（プレス・センター）で開催したのが、「韓国と日本における現代ジャーナリズムの発生に関する比較研究」の国際シンポジウムであった（当初は中国の研究者も参加の予定であったが、種々の事情で出席できなかった）。

このシンポジウムでは三つのテーマが用意され、それぞれ韓国側と日本側から報告された。その内容と担当者は次のとおりである。

第一のテーマは、「近代的ジャーナリズムの生成に対する伝統的なメディアの影響」で、

朴正圭（清州大）教授と筆者が報告、討論者は李光麟（西江大）教授と睦貞均講師、司会は彭元順（漢陽大）教授。

第二のテーマは、「近代的ジャーナリズム生成に対する西欧ジャーナリズムの影響」で、

鄭晋錫（韓国外国語大）教授と鈴木雄雅（本学）助教授が報告、討論者は崔起栄（世宗大）講師と武市英雄（本学）教授、司会は李相禧（ソウル大）教授。

第三のテーマは、「近代ジャーナリズムの生成に対する政治、経済、社会、文化的影响」で、

劉載天（西江大）教授と林建彦（東海大）教授が報告、討論者は金政起（韓国外国語大）教授と李光宰（慶熙大）教授、司会は李相禧教授。

本稿では韓国の新聞発生以前における伝統的媒体の様相と韓国の新聞に対する諸外国の影響、韓国近代新聞の生成に及ぼした政治的、社会的影響について、韓国側の報告を中心に紹介してみたい。

近代新聞発生以前の伝統的媒体

幕末、開国にともなって近代的新聞を目にした日本に続き、朝鮮の開国は約二十年遅れた。この遅れから日本の開港要求を受けることになった朝鮮国は、一八七六年二月の「日朝修好条規」により開国したが、国の近代化をめぐって、「開化」論者と「衛正斥邪」論者の対立を生むことになった。前者が改革派とすれば、後者は開国反対論とみられ、言論面でも鋭く対立する。

このような状況の中で、最初の近代新聞『漢城旬報』（漢文）が一八八三年十月に創刊される。李教授は、「この新聞は、西洋の文物を受け入れて短期間の内に国家を開化させようという目的で発行され、開化教科書のような役割を担い、保守的な勢力に対する強力な言論媒体として登場した」と述べている。

だが当時の国内情勢を見ると、それ以前、一八八〇年八月に修信使と来日した金弘集が、清国公使館の黄遵憲参贊官から贈られて持ち帰り、国王に呈上した『朝鮮策略』が、各方面に波紋を投げかけている。『朝鮮策略』は、世界情勢に暗く開化に反対する儒学者を啓発するために、直ちに謄写されて全国に配布されたが、儒学者たちはこの『朝鮮策略』に反対して上疏を始め、これが「衛正斥邪」の排外運動に発展する。この運動は一八八一年三月の「嶺南方人疏」（慶尚南北道の儒学者による上疏）に始まるが、弾圧にもかかわらず、「上疏」は以後、各道に波及し国王一族を驚かせる。この意見の糾合に使われたのが、「通文」（回し状）で、「通文」が大量に複製されて回覧され、意見の統合がなされたと、朴正圭教授は推測する。

李教授は、この時、使用された媒体を例に、韓国の伝統的媒体を次のように整理する。

一、書籍——『朝鮮策略』の謄写本や筆写本はその例だが、時には漢文だけでなく民衆に読ませるためにはハング

ル文字の本も出ている。

二、通文——前掲のように個人や書院、郷校などの機関に回覧されたもので、「通文」ができるまでには数回の会議が開かれ、賛成者は連名で署名した。参会者の間で論議が交わされてはじめて公論が決定し、「通文」として施行されるので、共同体的な性格が強かった。

三、上疏——上疏制度は、朝鮮時代に臣下が国王にその意志を上達させる代表的な媒体であった。内容は国事など公的事項から、辞職、病気休暇願いなど個人的な問題にいたるまで多様であったが、上疏が許される階級は、儒林（儒学者）と官吏に限られていた（官用文字の漢字を書ける人）。上疏も公論を代弁するという意味で、連名で行う「聯疏」の形式が多かった。

四、朝報——朝鮮時代のニュース媒体で、毎日新しいニュースを筆写して両班（いわゆる貴族階級）官僚などの限られた読者に伝えた。内容は、伝教（国王の命令に、法令にあたる）人事の任免、異動から地方官の報告、各地の事件、気象、天文、科挙など各種の消息が載っていた。書写で製作されたが、一部、印刷もあった。

五、綸音——国王が臣下や国民に下す文書。国民を説得し、懐柔する媒体として、必ず八道と四都に発送することになっていた。「勸農綸音」は毎年元旦に下すことが規定されていた。筆写で作成され、「朝報」を通じて報道された。

これらの朝鮮時代後期の媒体（複製文書）を、機能面から図示すると次のようになる。

分類	機能	名称
下向的媒体	上意下達	綸音、教書
上向的媒体	下意上達	上疏、上言

水平的媒体	世論形成	通文、檄文
報道的媒体	ニュース伝達	朝報、営奇、時俗風説
情報的媒体	知識伝達	書籍、文集

韓国で最初の近代新聞といわれるのは、前述した『漢城旬報』およびその後継紙とみられる一八八六年一月創刊の『漢城週報』である。李教授はこの両紙の内容を分析する。

『旬報』と『週報』はともに外国の新聞を模倣したもので、性格も似ているが、体裁と内容にはかなりの差異がある。まず記事の件数を、国内と国外に分けて比較すると『旬報』は、二十八対七十二で圧倒的に外国記事が多いが、『週報』は、四十七対五十三の割合で均衡している。ともに国外記事は外国の新聞、雑誌からの引用が多いが、国内記事は「朝報」の転載が多く、とくに『旬報』は第五号から国内記事を、官報と私報に分けているが、国内総記事四百三十七件のうち私報は六十三件にすぎず、『週報』も国内記事は概して「朝報」の記事のみを掲載している。両紙とも「朝報」「上疏」「論音」などの記事を載せているが、それだけで伝統的メディアの系譜の中から生まれたとは言えない。さらに『週報』には解説記事や論説形式の「私議」欄があり、かつハングル文字と漢字の混交となっている。

以上のような李教授の報告は、「韓国の近代新聞は、日本と中国をとおして間接的に（西欧の近代的新聞を）受容したものといえる。だがそれは、単純に外国の影響でなされたものと見て、韓国にはそれ以前には、新聞と呼ぶべき言論媒体が存在しなかったとする見解は修正されなければならない」ことを論証しようというもので、まだ今後の研究の成果にまたねばならないところもあるが、興味深い報告であった。

技術の発展を促した海外の影響

鄭晋錫教授は、「韓国近代言論の生成に及ぼした外国ジャーナリズムの影響」と題し「中国、日本の初期ジャーナリズムは直接、西欧の新聞の影響を受けたのに比べ、韓国は初期には主に中国、日本の影響を受けながら、一方では西欧に影響されることになった」として、外国ジャーナリズムの影響を印刷設備の移入など、種々の技術的發展に焦点をあてて報告した。

まず印刷設備の面では、日本人は『漢城旬報』に先立ち、釜山で一八八一年十二月、日本語で『朝鮮新報』を発行したが、この時、漢字、日本字、ハングル文字を備えた印刷所を釜山に設立した。一八七九年ころのことで、これが韓国最初の西洋式印刷機である。

だが、内容の面では、韓国最初の近代新聞『漢城旬報』の発刊を推進したのは日本人であるが、内容はむしろ中国の影響が大きかった。その理由は、当時の記者は漢字通が多かったので、引用する新聞も日本の新聞より中国の新聞が多かったためらしい、という指摘は注目される。

ついで鄭教授は、外国人と外国ジャーナリズムが及ぼした影響をまとめて、次のように述べた。

一、西洋宣教師と日本人たちが、満州（現在の中国東北部）、上海、横浜などで韓国語活字を作り、西洋式印刷設備を導入したため、韓国の印刷文化は発展したので、これらの国との関連を無視できない。（これは一八七一年ごろ、満州地方で韓国人と接触しながら宣教していたスコットランドのロス牧師が聖書の韓国語訳を企て、一八八一年、上海から印刷機を購入して奉天〔現在の瀋陽〕に据え付け、韓国人翻訳者らが作った木活字を日本に送って、四万字の鉛活字を作らせ、再び奉天に運び、数々の福音書を印刷した後、一八八七年、初めて韓国語の聖書を作ったことを指す。）

二、日本人発行の新聞は、内容の面では侵略の代弁機関といえるが、新聞・出版の発行技術の向上には、大きな役割を果たした。

三、宣教師が運営した Trilingual Press と日本人経営の新聞社は、韓国の印刷所と新聞・雑誌社に、技術を伝授し、人材を供給した。

四、とくに宣教師らの韓国語出版物は、『独立新聞』『毎日新聞』などの初期新聞の韓国語使用を刺激し、自信を与えた。

ジャーナリズムの発展は、技術や交通、通信の発展によって飛躍的展開をみせることが多い。技術の発展が言論の内容まで変革することもある。ニュー・メディアの出現などその一例であろう。その意味で、鄭教授の報告は、重要な課題を含むものと言えよう。

使命感を持って発展してきた新聞

劉載天教授の報告は「韓国近代新聞の生成に及ぼした開化思想と民族主義の影響」であるが、劉教授は、昨年まで「韓国言論学会」の会長を勤めた学界の長老である。

劉教授はまず「韓国の近代新聞は、その時代の社会的、政治的目標を達成するための手段として発生し、成長、発展してきた」と述べる。「初期は開化の手段として、その後は次第に露骨になってきた帝国主義的勢力の侵略から国権を保持し、回復する手段として。日本の統治時代には、自主独立を爭取するための民族的力の培養と植民政策に対する抵抗の手段として。終戦後は、民主独立国家を樹立するための理念闘争の手段として新聞は存在してきた。」

このような使命感を持つ韓国の新聞は、情報の伝達を基本的な機能として発展してきた西欧の新聞とは異なり、規範的側面に力点をおいてきた規範新聞であり、その性格は、近代新聞の発生に関連した時期、朝鮮王朝末期の政治、経済、社会、文化的状況を通じて形成されたと見る。そして一八七六年の開国から一九一〇年の併合に至る期間を対象に、開化思想の性格、韓国における近代民族主義の台頭と展開を展望し、韓国の近代言論の発生は、開化思想と民族主義によって成し遂げられた。したがってこの時期の言論は、それらの思想と民族主義を伝播し、啓蒙し、具現する手段を受け持ったのである。それが愛国啓蒙運動の中心であったとする。

韓国の言論のこのような把握の仕方は、日本の研究者にも大いに刺激を与えるに違いない。この愛国的啓蒙運動については、朝鮮民族文化発展の重要な段階を成し遂げたものとして、北朝鮮の歴史記述でも高く評価されているようである。

紙数も尽きたので、日本側の報告は割愛するが、鈴木雄雅報告は、日本の初期ジャーナリズムに影響を及ぼした欧字新聞と外人ジャーナリストに触れた発表、林建彦報告は、明治国家の新世代を代表する田口卯吉をとりあげ、『東京経済雑誌』に現れたそのアジア観、朝鮮論を批判したもので、いずれも参会者の注目を集めた。詳しくは新聞学科の研究紀要『コミュニケーション研究』第二十一号に、筆者の報告を含めて掲載されているのでご覧いただきたい。

筆者は文学部教授（新聞学）